



2011年
(平成23年)
10月1日発行

ELCO RADAR

環境にやさしい社会づくりを目指す

社団法人 環境生活文化機構

Vol.48

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-20-10 サンライズ山西ビル6F TEL03-5511-7331 FAX03-5511-7336 <http://www5.ocn.ne.jp/~elco/> E-mail:elco.inc@trust.ocn.ne.jp



人と地球をつなげたい
人と人をつなげたい

環境ジャーナリスト 幸せ経済社会研究所 所長
(有)イーズ (e's) 代表 (有)チェンジ・エージェント 会長
ジャパン・フォー・サステナビリティ 代表

枝廣 淳子氏

環境ジャーナリスト、翻訳家、NGO 代表、政府委員などいくつもの肩書を持つ枝廣淳子さん
は、東京大学の研究機関で客員研究員を務める学者でもあり、環境ビジネスウィメン懇談会に
名を連ねる事業家でもある。多岐にわたってご活躍だが、もともとの専攻は「心理学」。ノイロー
ゼ患者や登校拒否の子どもなどのカウンセリングをするなかで、「大事なものとの関係性が切れ
たとき、人にも社会にも環境にも重大な問題が起きる」と気づき、ジャンルを問わず切れた関
係の修復に取り組む。キーワードは「つなぐ」。持続可能な社会形成に向けて、暮らしと地球環
境の「つなぎ方」などを伺った。

(聞き手は社団法人環境生活文化機構・森田義雄事務局長)

暮らしと地球のつながりを知ることが大事

野生児として育った

——環境問題と関わるようになったきっかけからお話しいただけますか。

枝廣 2つあると思っています。

1つは、幼児期から小学校の4年生まで自然がいっぱいの田舎に住んでいたことです。学校から帰ると、ランドセルを放り出して家の前の田んぼでカエルをつかまえたりトンボをとったりして遊びました。そういう野生児生活を送っていました。その時に、まあ子どもですから言葉には表せないのですが、大地とのつながりみたいなものが育まれたと思っています。

もう1つは、同時通訳の仕事を通して知り得た知識や情報です。

私は大学では心理学を勉強していきまして、環境や、そして英語とも、関係がありませんでした。たまたま29歳の時、アメリカに2年間行くことになりました。せっかく行くなら英語を勉強しよう、どうせ勉強するなら同時通訳ができるレベルを目標にしようと思いました。

一生懸命勉強した結果、31歳で帰国してから同時通訳の仕事を始めることができました。通訳者は、日替わりでいろいろな分野の学会やシンポジウムなどの通訳をします。コンピューター関連だったりお医者さんの学界だったりとその時々でいろいろですが、通訳するなかで「あつ、これは面白い」、自分でも勉強しようと思ったのが環境の分野だったので。

たぶん、幼少期の経験が大人になって環境分野に興味を持つ、一つの伏線になったのかなと思っています。

切れた「つながり」を取り戻す

——同時通訳者が呼ばれるのは、当たり前ですが国際会議などのお仕事ですね。先生は環境問題に初めからグローバルな視点で入られ、翻訳家としてはデニス・メドウズ氏らの著書『成長の限界—人類の選択』やアル・ゴア氏著書『不都合な真実』などを手掛けられていますね。

枝廣 私は、同時通訳の仕事をしているときも、環境ジャーナリストといわれる仕事をしているときも、基本的にやっていることは同じだと思っています。

大学の学部と大学院で心理学を専攻し、カウンセリングをやっていたのですが、そのときも全く同じです。例えば、ノイローゼの方とか、登校拒否のお子さんなどのカウンセリングを担当したときに強く思ったことがあります。それは、人は大事なものとつながりが切れたとき、様々な問題を起こす——ということです。

例えば、自分が本当にやりたいことと、外から期待される自分とがあまりにも違ってしまうと、それはメンタル的にもとても厳しい状況になります。ノイローゼの方にしても、登校拒否のお子さんにしても、自分にとって大事なものと、周りから見られている自分との大きなギャップに悩んでいる。そして、その大事なものとつながりが切れたとき、大変なことが起きる。

そして、カウンセリングだけでなく、実は世の中のあらゆる問題も同じ原因ではないかと思うようになりました。

自分と家族とのつながりが切れたとき家庭の問題が起きるし、自分と地域のつながりや、もっと大きくいうと自分と地球とのつながりが見えなくなったとき、環境問題が起きると思うのですね。

そして、切れてしまったつながりをもう一度見直す、もう一度取り戻すお手伝いをしたいと思ったのです。これは、カウンセリングをやっていたときからずっとやりたいと考えていたことです。

カウンセリングであれば、「本当にあなたは何をしたいの？」の答えを見つけ出し、そのことと周りから期待されている姿とを、できるだけ近づけていくことです。

環境問題に関してお話ししますと、だれも環境を破壊したいとか、温暖化を加速したいと思って暮らしているわけではないですよ。しかし、今は結果的に私たちの暮らしが環境に過剰な負荷を与えるような状況になっている。つまり、ここでもやはり私たちの暮らしのあり方と地球とのつながりが切れて

しまっていると思うのです。

例えば、何か食材をいただいて、「おいしい」とか「お値段はいくら?」とか言いますけど、それが地球のどこでとれてどのように運ばれてきたかといったことは見えなくなっているわけです。

そのように切れてしまった関係、あるいは見えなくなっているつながりを取り戻すお手伝いをする——、これが私の基本的な姿勢です。

ですから、今はたまたま環境の分野で活動をしているし、環境問題が人々の注目を浴びているので周りの方から「環境ジャーナリスト」などと呼ばれるようになっていきます。

でも本当は、環境の問題は早く片付けて元々やりたかった心の問題に戻りたい。もっとも、私が生きている間に環境の問題が解決するとは思えません。

その時々で大事なことを実践

——それにしても先生の活動は多岐にわたっていますね。2004年にはマルチキャリアの展開が評価され、日経BP社の情報誌『日経ウーマン』の「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2004キャリアクリエイト部門賞」を受賞されました。

枝廣 肩書でいうと同時通訳、翻訳家、環境ジャーナリスト、そしてNGO代表。「いろいろなこと、やってるね」と、よく言われますが、今お話したように伝えること、つなげることをやりたいのです。

それが講演だったり、このようなインタビューだったり、あるいは本の執筆や翻訳だったりするわけです。

国の委員会などにも出させていただいています。つい先日も菅前首相の懇談会(自然エネルギーに関する総理・有識者オープン懇談会)にも出席させていただきました。

——ソフトバンクの孫正義社長も出席した、インターネットで公開された懇談会ですね。

枝廣 私は環境やエネルギーの専門家ではありませんが、市民側のメンバーとして呼ばれました。福田・麻生内閣の「地球温暖化問題に関する懇談会」にも参加したのですが、私としては政府と市民をつなげ



『よいコミュニケーター3原則』をマスターして下さい

る活動と考えています。

日本と世界をつなげる活動としては、同時通訳、翻訳のほかに、日本の持続可能な社会へ向けての取り組みを英語で世界に発信するNGOジャパン・フォー・サステナビリティ(JFS)を2002年に仲間と立ち上げました。世界191ヶ国・地域に毎月30本の情報を発信し、またフィードバックもたくさん寄せられています。

肩書に捉われることなく、その時その時大事だと思うことを実践しています。その結果、「いろいろなこと、やってるね」といわれるようなことになりました。

——ご著書・翻訳書も、環境関連のルポや啓発書、生活見直しのアドバイス、それから英語学習関連の本やビジネス書、そして「いじめ」に関する指導書など、極めて多岐にわたっていますね。

よいコミュニケーターになるには

——心理学がご専門としても、結果として活動範囲がどんどん広がっていますね。その行動力の背景には、同時通訳という実践もあるのではないかと想像しますが。

枝廣 基本的には「伝える」ことが仕事です。そして、伝えるとは、本当に相手に伝わってナンボだと思うのですね。



1 個しかない地球でどう生きるか、長期ビジョンが必須です

よく政府の方や企業の方に言うのですが、シンポジウムなどでいろいろ発表されても聴衆にきちんと伝わっていない話し方をされる人が実際多くいらっしゃいます。

そのように話しますと、「では、伝える話し方のコツは何ですか？」と、よく聞かれます。

私は学会とかシンポジウム、パネルディスカッションなどの同時通訳を10年以上やっていたから、おそらく数千人という方々の話し方を見てきました。そうしたなかで、通訳のブースで聞いていると伝わる講演者と伝わらない講演者の違いが見えてきました。壇上の人のお話会場が聞き入っているか、もう注意散漫でほとんどの人が聞いていないか、よく分かる。

何がその違いをもたらすのだろうと考えて、伝わる講演者には3つの共通点があることを見つけました。

「エダヒロのよいコミュニケーター3原則」といってよくお話するのですが、1つは講演者が本当に伝えたい気持ちを持っているかどうかです。役目だから仕方がないといった気持ちで話される方もいますが、そういう人の話は伝わらない。本当に伝えたいと思って壇上にいるかどうかで、大きな違いが生まれます。

2つ目は、伝えるべき内容をお持ちかどうかです。伝えたい気持ちがあっても、内容がないという方も

結構いらっしゃいます。すごく熱心に話されるのですが、通訳するべき内容がない。まあ、ご自分を売り込みたいという方に多いパターンです。

さすがに学会やシンポジウムなどに出席される講演者は1と2、伝える気持ちや内容はお持ちの方がほとんどですが、特に日本人に欠けているのが3番目、「伝えるスキル」です。

どれだけ伝えたい気持ちがあっても、どれだけ伝えるべき内容があっても、伝えるスキルがないと話がカラ回りしてしまいます。

聴衆の関心がどこにあるのか。年齢とか生活実態に合わせた言葉や表現を選ぶ。データを重視して話すか、具体的なエピソードを織り交ぜて話すか。それを講演者は最初の段階で聴衆の反応をある程度見抜いて、聞き手に合わせていくことが大事です。

ご自分の得意のパターンで押し通す方もいますが、これだけではだめです。例えば理系のデータを重視される方は、データだけで攻める。そうしますと、データが分かる人は聴けるが、右脳派の人には何が何だか分からない。右脳派にも伝わる部分、左脳派にも伝わる部分をちゃんと織り込んで、だれでもどこかで「分かった」と思うように話さないといけません。

——むずかしそうですね。

枝廣 このことは、環境問題の一番大事なポイントの一つで、政府も企業も一生懸命情報を開示しようとしているのに、つまり伝えたい内容はあるのに、コミュニケーションのスキルが下手で市民に伝わっていないことが多いのですね。

そういう意味で、よいコミュニケーター3原則はぜひ多くの皆さんに身につけていただきたいと思っています。

バックキャストとシステム思考の勧め

枝廣 それから、今の環境問題もしくは持続可能な社会を考える上で絶対に必要なのがバックキャストとシステム思考の考え方です。

バックキャストは、ビジョンをつくるための方法論です。

例えば2020年の日本のCO₂排出量をどうするかとか、いろいろ議論されていますよね。これまで日本政府や企業や、専門家といわれる人の多くを含

めてやってきたのはフォアキャスティング、現状立脚型が多かった。現在の技術でこれだけのことができる、だから3年後の排出量は今のくらいまで減らせるから、これをビジョンにしよう——というようなやり方です。

これは、未来が過去の延長線上にあった時代には有効でしたが、現代のように大きく時代が変わるときには役に立ちませんし、長期的ビジョンはつくれません。

バックキャスティングは、今何ができるかできないか、例えばお金があるとかないとか、技術のあるなしなどはみんな脳に置いておいて、あるべき姿を先に考えるやり方です。

温暖化対策でいえば、まず地球は1年間にどれだけCO₂を吸収できるかを研究する。そうすると、その吸収できる量が、排出量の削減目標になるわけです。

少し古い数字ですが、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)が2007年に出した第4次報告書によると、地球は1年間に31億トンの炭素を吸収している。それに対して、人類は化石燃料を燃やすことなどで72億トンの炭素を排出している。まずは72億トンを31億トンに減らすことを目指さないといけない(実際にはさらに減らし続ける必要があります)ということで、先進各国はそれぞれの削減目標についていろいろ議論しているわけです。

そして、バックキャスティングで描いたビジョンをどのように現実的に動かしていくかというときに重要なのがシステム思考です。

現実はいろいろな要素がつながって全体が出来あがっていますから、よかれと思ってやったことが他の所に悪影響をもたらすということは、よくあります。

温暖化対策の例でいえば、バイオ燃料の問題があります。生物由来の燃料で化石燃料に代替すればたしかに温暖化対策にはなりますし、現実に世界中に広がっています。しかし、現状の

ようにトウモロコシなどを原料にしていると、今度は深刻な食糧問題を引き起こしてしまいます。

温暖化対策であれ持続可能な社会形成であれ、何でもシステム思考で全体像を見て解決策を考えていくことが大事です。

チェンジ・エージェントを育てる

——2003年に設立されたイーズ(e's)という会社の事業内容を拝見しますと、情報発信や情報交流が一つの柱のようですが、もう一つ、そのバックキャスティングやシステム思考でキャリアアップをお手伝いするものが多いように思いました。

枝廣 私がバックキャスティングを言い始めたのは、個人の人生の目標を考えた経験からです。

先にもお話ししましたが、29歳でアメリカへ行った時は英語がほとんどできなかったのですが、2年間勉強するにあたって達成したい自分の英語力の目標を決めました。それは、2年後成田空港に降り立った時の自分は同時通訳ができる——。バックキャスティングですね。

当時の自分にとっては途方もなく高い目標ですが、その目標を達成するためには何が必要か、現実的に落とし込んで、それに合わせて勉強しました。

——ご自身の体験をまとめられた著書『朝2時起きで、なんでもできる!』をシリーズで第3弾までお書きになっていますが、大変努力されたんですね。

枝廣 繰り返すようですが、バックキャスティング



3.11以後、被災された方々の希望を支える活動を続けています
右は聞き手の森田事務局長